

神護寺藏「和氣氏三幅対」の成立と訓釈

若井勲夫

要旨

高雄山神護寺所藏の「和氣氏三幅対」と呼ばれる書は、三名の和氣氏の肖像画に賛を記したものである。江戸時代初期に、神護寺と関はりの深い和氣清麻呂の後裔に当る半井瑞雪は、神護寺の復興に寄与するとともに和氣清麻呂の功績を回想し、和氣医道の流れを顕彰するために、絵師に肖像画を描かせ、それに僧侶が賛の偈を書いたものを寄進した。この書が世に知られるやうになったのは医史研究家の杉立義一氏の紹介によってであるが、それも成立の簡単な説明と筆者が原案を示した筆蹟の解説と訓読文だけであった。

そこで、筆者はこの三幅の偈について、本文の訓読、現代語訳、語釈を注釈的に綿密に施し、その成立と難解な語について補説し、史的に位置づけた。このやうな訓釈は初めてのことであり、これによって三幅対の全体像が体系的に明らかになった。以下、その要点を記す。

(1) 和氣真人像は、真人が誰であるか三説があったが、多くの資料に基づいて、清麻呂であると論証した。清麻呂は和氣氏の祖だけでなく、和氣医道の祖と位置づけられ、神護寺の本尊、薬師如来に継ぐ聖なる者として崇められた。詩偈の由来について

も、黄檗山萬福寺の開山、隠元が高雄山に登った後、瑞雪の依頼により清麻呂を追薦するために作り、それを弟子の獨知(慧林)が書いた。時期は寛文年間である。(2)「真人」の解釈について、慧林が真人を讃へる詩を別に作つてゐた。また、前南禅寺の住持、英中も同じころ詩偈を作り、清麻呂の事績を述べて、真人として評価してゐた。また、半井家や神護寺に伝はる文書、江戸後期の記録や漢詩から清麻呂が真人として表されてゐる。(3)和氣時成像は、時成と明暦二年書が明記されてゐる。偈の作者の前南禅寺の昶叔についても明らかにできた。(4)和氣基成像は、基成であることは書かれてゐるが、成立時期について、書の作者の前南禅寺の九巖が建仁寺、相国寺にも関はつてゐて、万治元年以前であらう。(5)三幅像の成立時期は明暦、万治、寛文の五、六年間である。三幅像の描き方については、真人像が本尊としての扱ひ、他の二像が脇侍の扱ひで、質的に区別されてゐる。(6)半井瑞雪が和氣医道中興の祖とされる定成を選ばず、その子の時成、孫の基成にしたのは、基成の弟から半井家本流に繋がり、基成の代が絶えたこと、それを自分の身に擬したのではないかといふこと、また、同世代の肖像画が他にあったことなどによらう。

キーワード：神護寺藏和氣氏三幅対、和氣清麻呂、和氣時成、和氣基成、半井瑞雪

一、神護寺と「和氣氏三幅対」

和氣清麻呂は宇佐八幡宮の神託を受けて国家の安泰を護ったのは神力の御蔭として、その神願を果すべく、一寺の建立を光仁天皇、続いて桓武天皇に奏上した。勅許を得て、延暦年中に伽藍を建て、神願寺と名づけ、天皇はこの私寺を国家鎮護を祈る官寺に準ずる定額寺じやうがくじとされた。しかし、当地は低湿化のため（一説に河内国石川郡、また、山城国久世郡）、密教壇場としてふさはしくなかった。そこで、清麻呂の子、真綱らが上奏して神願寺を、もともと高雄山にあった高雄寺（高雄山寺）と合併して、改めて定額寺として、天長元年（八二四）、神護国祚真言寺とした。この寺名は、神が国の栄えを護る真言の寺といふ意味で、略して神護寺といふ。一方、もとの高雄寺の創建については不明であるが、高雄山に和氣氏の氏寺として建立されてゐて、清麻呂の墳墓も当寺にある。

この高雄寺に、清麻呂の子で大学頭兼式部大輔の和氣広世が延暦二十一年（八〇二）、最澄を招請して法華経を講述させた。さらに最澄は同二十四年に渡唐から帰国して、当寺で灌頂法を修した。しかし、弘仁三年（八二二）、唐から帰った空海が当寺に入り、真綱、仲世（清麻呂の子）らに金剛灌頂を授けた。これより空海が中心となって道場を維持し、前述の、神護国祚真言寺と改称されたことにより、真言宗の寺院として確立した。なほ、金堂にある本尊の薬師如来像はもと神願寺にあったものを神護寺に移したものとされてゐる。

さて、和氣氏は清麻呂の曾孫、和氣時雨ときふるが医学に志し、針博士、典てん

薬頭やくのかみ 侍医となり、和氣医道の出発となった。この後、和氣氏の子孫は医家として指導的な役割を果たした。室町時代に至り、医家の丹波氏から二代続けて養子をとる、明親（天文十六年（一五四七）没）の代に、姓を半井なからいと改めた。その後、和氣氏の本流は半井氏となり、その子孫は大正時代の半井鉄道かねみちまで医道に尽してきた。

江戸時代初期に清麻呂の後裔である医師の半井瑞雪（宗閑）は清麻呂と関はりの深い神護寺に対して、その復興に寄与するとともに清麻呂を顕彰すべく、「和氣氏三幅対」の書を寄進した。その三幅は和氣真人（清麻呂）、和氣時成（ときしげ、ときなり）、和氣基成（もとしげ、もとなり）の肖像と黄檗宗と臨済宗の僧による賛（偈）が書かれ、現在も神護寺の寺宝として所蔵され、公開もされてゐる。

この「和氣氏三幅対」を広く世に紹介したのは産婦人科の開業医の傍ら、医史研究に努めた杉立義一すぎたけ氏である。杉立氏は『京都の医学史』^{〔1〕}本文篇の巻頭口絵に初めて写真を掲げた。その後、その解説と詩偈の書き下し文を発表し、とりわけ和氣真人が誰であるかを究明した。この筆蹟の解説と訓読については私が作成した原案をもとにされたが、私自身、不十分な点があり、誤植も少しある。その上、真人像が誰かについては難解で、杉立氏は当初、和氣氏医系の祖として時雨としたが、後に、和氣氏中興の祖たる定成と考へ、最終的に清麻呂に落着いた。この点に関しても、私も杉立氏と論議したが、両者が捜し求めた資料を突き合せて、最終的に清麻呂と判定した。

本稿はこの三幅対について、本文を掲げた後、訓読文、現代語訳、語釈を注釈、評釈的な立場で厳密に施し、次に、成立と補説で、その

成り立ちと難解な語について解説する。従来は訓読と成立事情の説明で簡単に終ってゐたが、それ以上に国文学的に訓釈し、考証する。これは研究史上、初めてのことである。続いて、三幅対の意義について広い視点から考察し、真人の意味付け、神護寺にある価値について明らかにする。

二、和氣清麻呂像



大功不宰久彌新
錯節盤根妙入神
德被乾坤千古重
心懸日月一天真
頓超靈鷲無生果

徹證蓬萊不老春

七百年來法眼裡

聊唸半偈表賢人

録

黄檗老人薦

和氣真人之偈

佛日山野獨知書

〔訓読〕

大功は宰らず、久しく彌新たに

錯節盤根、妙神に入る

徳、乾坤に被りて千古に重く

心、日月に懸けて一天真なり

頓に靈鷲無生の果を超え

徹証す、蓬萊不老の春

七百年來、法眼の裡

聊か半偈を唸じて、賢人を表す

録す

黄檗老人の薦する

和氣真人の偈

佛日山、野の獨知書す

〈現代語訳〉

偉大な功績といふものは、そのはたらきをした者の跡を留めず、手柄ともせず、いつまでも伝はり、時が経つてもますます新しくなるものである。和氣氏の医術は入り組んで難しい症状に対して、その巧みで優れた技術は神業かと思はれるほどに達した。その徳は天と地に広く行きわたり、永久に重く尊ばれ、その心は日月が天に懸つてゐるやうにいつまでも長く残つて、天から与へられた純粹な自然のままの一つの世界を成してゐる。その徳と心によつて、釈迦が説法した靈鷲山における生滅変化することのない因果を直ちに超えて、神仙の住む蓬萊山における、いつまでも老いることのないやうな春をこの世に明らかに顕はすことができた。和氣氏は七百年このかた医師として務めてゐる。私はこの功績に対して少しばかり中途半端な偈を口ずさんで、表彰して讃へる。

録する

黄檗老人の追薦する和氣真人の偈を佛日山の野僧である獨知が書く。

〈語釈〉

○大功不宰——『国訳黄檗和尚^{たむわ}太和集³』では訓読せず、「大功は宰せず」と音読してゐる。しかし、これでは訓んだことにはならず、国語として解釈しにくい。「宰」はつかさどる、をさめるの意で、主宰する、中心になつて行ふことである。ただ、室鳩巢の『駿台雑話』一に「一心を治むといへど、万年を宰するにたらず」と、「宰する」といふ用

法はあつた。老子(第十章、第五十一章)、莊子(外篇第十九章)の「長じて宰せず」は、生長させてもその主宰者や支配者を気取らず、自然に任せることをいふ。老子(第二章)の「功成りて居らず」は、成功者の位置に留つてはならないことで、右と同じ意味である。隠元は(後述)はこの語を愛用し、「功成りて宰せず、徳業始めて全く彰る」、「功勳宰せず無私の力」など、しばしば見られる。空海の「性靈集」六に見える「不宰の功、何ぞ敢へて比喩せむ」は「大功不宰」の順序を逆にした体言的な表現で、ここに老子の言ふ無為自然の「玄德」があるといふ。

○錯節盤根——木の節や根が入り組んでゐて、解決が困難なことをいふ。一般には「盤根錯節」の語順である。ここを「錯節盤根するも」と動詞に訓んでもよい。

○妙入神——伊藤仁齋の『同志会筆記』四十七則にある「神に入り、妙を極むる」が好例である。「人格、学問、技芸などが非常に高い程度に達し」「神の域に入り」、「この上なくすぐれていること」である。

○被乾坤——「乾坤を被ひ」と訓んでも意味は同じであるが、太和集の「乾坤に被り」の訓みに従ふ。かうむる(かがふる)は、覆ふ、かぶる、受けることで、受身的、状态的な意味の方がよいであらう。同じく、『同志会筆記』十五則に「仁、天下を覆ひ、義、万世に被るは、学問の極功、聖人の能事、これここに尽くるか」とある。「覆ひ」はゆきわたる、「被る」はあまねくおよぶことで、ともに同じ意であり、仁や義が天下、万世に広く伝はつてゆくことをいふ。この偈では徳のことについて述べ、千古の重みがあるといふ。なほ、太和集では「聖人

の御世、民徳を旌し、広く蒼生に被りて」と、万民に対しても使はれてゐる。

○懸日月―太和集では「日月を懸く」と訓んでゐる。これは「丹心日月を懸く」⁽⁸⁾「心日月を懸く」⁽⁹⁾でも同じで、「を」格で訓んでゐる。しかし、「(丹)心、日月を懸く」とはどういふことか。丹心は(または、丹心をは)、太陽や月を懸けて常に光り輝いてゐるといふ意味ではしつくりしない。また、前の句の「被乾坤」の対句表現と合はない。『日本国語大辞典』第二版⁽¹⁰⁾では、「日月を懸く」を見出し語として「重要なものが二つながら備わり、欠けることがない」と説明する。「二つ」とは「日月」によるのだらうが、ことさら「二つ」の意義がこの句に含まれるはずがなく、意味も取りにくい。ここで考へ合されるのが、『性霊集』卷三の詩である。「之を日月に懸けて、昼夜に精勤して」は「日月が天に永久に懸っているように、(皇恩を)いつまでも忘れずに」といふ意味である。また、同卷十の「日月に懸けむと欲して、詞を余が翰に恣ふ」⁽¹¹⁾は、「日月の天に懸れるがごとく長く残すこと」を望んでゐる。この偈も空海の詩と同じく、心を、日月がいつまでも天に懸つてゐることくに、あたかも心を日月に懸けるやうにして、永遠にあり続けることを言ふのである。通説の「日月を」の「を格」であれば意味をなさない。

○一天真―一で切つて、天真で熟語と考へるべきであらう。「一天、真なり」とも訓めさうで、意味も通じるやうであるが、「一天」では広さと深みがない。太和集では、「一日膽礼(礼拝)すれば一たび天真」「妙、天真に徹証せん」、『隠元禪師普門語録』で「風心不一、一天真」

とあり、さらに何よりも遺偈で、「頓に法界を超えて一真空」と詠んでゐることから、ここはやはり「一・天真」と解釈すべきである。

○頓―「頓」にはかに、すぐにといふ意味であるが、この文脈では直ちに、即ち、そのままと、禪的に解すべきである。隠元はこの語を愛用してゐる。禪宗で修行を段階的に踏むことなく、一瞬、一挙に悟りを開く「頓悟」、また、仏教で一般に言はれる「即身成仏」「即心是仏(即心即仏)」と同じ真意であらう。

これ以下の二句は、和氣氏は仏家ではないので、釈迦が説法した靈鷲山で、無生の果、即ち、生死を超越した涅槃の境地に達するといふことよりも、むしろ医家として現実の生活の中で術を施し、人々に仙人の住む蓬萊山で暮らすやうな、長寿の生活を実現させ、人生を幸せに導いたことを言ふのであらう。

○七百年來法眼裡―この偈は寛文元年(一六六一)から同十三年の間に成立した(後述)。この七百年前を単純に計算すると、西暦九六一から九七三年の間となる。「法眼」とは中世以来、僧侶に準じて、仏師、絵師、医師など、法体の者に授けられた称号である。右の期間に医師の地位にあった和氣氏は和氣時雨であり、天曆十一年(九五七)に典薬頭となり、康保二年(九六五)に六十七歳で没した。時雨は和氣清麻呂の子である真綱の孫に当り、これ以降、医師の家系が続くこととなった。この句はそのことを指してゐる。

〈成立〉

この書ができた事情については、偈の末尾の「録」で知ることがで

きる。ただ、もう少し詳しい由緒は、太和集を調べて判明する。その題詞には、「半井瑞雪、遠祖和氣清麻呂真人を薦せんことを求む」と述べられてゐたのである。半井瑞雪（後述）が半井家の遠祖である和氣清麻呂を追薦する偈を作るやう隠元に依頼した。その偈を後に、獨知が書いたことがわかる。以下、このことについて、「録」を合せて語釈とともに、考証していく。なほ、太和集では偈の最後の句が「真人を表す」となつてゐる。これは隠元が後に改めたのか、「賢人」の誤植なのか、獨知が書く時に「賢人」と誤つたのか不明である。

○黄檗老人―黄檗山萬福寺の開山、隠元隆琦を指す。平久保章『隠元』によれば、隠元は弟子によつて、「黄檗老人」（木庵獨照）、「老和尚」（同）、「開山老和尚」（鉄牛、南源）、「隠老祖」（潮音）と崇敬の念をもつて呼ばれてゐる。隠元は承応三年（一六五四）清国から来日、随従した者は獨知ほか総勢三十人と言はれる。万治二年（一六五九）正月に洛西の寺を巡拝した後、高雄山に登り、神護寺を参拝、ついで愛宕山に登り、月輪寺を拝してゐる。和氣清麻呂との関りはこの時から始つた。また、同年二月には、摂津国麻田（現池田市）の藩主青木重兼（端山）の開創した寺に招かれて、佛日寺の額を揮毫した。これが偈に出る「佛日寺」であり、摩耶山佛日寺と今も称してゐる。同年十一月に宇治五ヶ庄の太和田（大和山）に新しい寺地の決定の令旨を受け、寛文元年（一六六一）に黄檗山萬福寺の開山として晋山した。太和集はその翌年に南源と高泉が編集して、鉄眼によつて開板された。従つて、この偈の作られたのは神護寺参拝の万治二年から三年間のうちといふことになる。隠元は書に巧みで、多くの題讚や詩偈を求

められるまま書いてゐるので、偈そのものは、高雄山登拝の直後としてよいであらう。なほ、「高雄山に遊び、弘法大師の勝跡を謁す」、「愛宕山に登る」の七言律詩を詠んでゐるが、和氣清麻呂については触れてゐない。

○薦―「薦」は「すすむ」と訓読するが、祭祀に際して神仏に供物をすすめる、つまり、手向けてたてまつることである。これは仏教語であり、「亡者の末世の福を助けること、死者の冥福を祈つて供えること」である。熟語として「資薦、追薦」があり、後者は『一遍上人語録』上にある「祖父（河野）通信の墳墓に追薦し給ふ時に」など、古典作品によく見られる。隠元も「居士（信士）を薦せむ」「靈福を薦む」などと、しばしば使つてゐる。現在、よく言はれる「追善供養」と同義である。

○真人―和氣清麻呂は姉広虫とともに、在所の地名に因み、磐梨別公、ついで、藤野別真人の氏を賜つた。このことから、「和氣真人」とあれば、和氣清麻呂を直接に指すと考へやすい。しかし、隠元が来日後、五年で神護寺を初めて訪れ、清麻呂のもとを氏を知ることはいだらう。この「真人」は和語ではなく、音よみする仏教語、とりわけ禅語である。

『岩波仏教語辞典』第二版によれば、「真人」（しんにん、しんじん）は、莊子にいふ「道の根源的真理の体得者」のことで、後に「神仙として道教化」された。仏教語としては『臨濟録』上堂三則にある「赤肉団上に一無位の真人有り、常に汝等諸人の面門より出入す」の「無位の真人」が知られてゐる。これは「いかなる枠にもはまらず、一切の範

疇を超えた自由人⁽¹⁸⁾」のことである。この禅的な「自由人」が偈に見える「頓に靈鷲無生の果を超え」の境地を指すのであらう。わが国での古い用法は「凡人に非じ、必ず真人ならむ」(推古紀、二十一年十二月)で、「真人」は「ひじり」と訓まれてきた。しかし、ここはそこまで考へなくても、「すぐれた人、まことの人、ほんとうの人間」と解してもよいであらう。それを敬称として用ゐるのである。なほ、隠元はほかに「万里の外に一擲して無位の真人の畏れを刮著し」「百鍊を経て始めて徹骨の真人と成る」など、多様な使ひ方をしてゐる。

○佛日山野獨知—寛文元年(一六六一)、前述の通り、青木重兼が建立した佛日寺に隠元を開山として、法嗣の獨知が初代の住持として入寺した。「獨」のつく道号は黄檗宗に多く、後に、慧林性機と改めた。この偈の右肩に押されてゐる関防印(引首印)に「臨濟三十三世」とある。萬福寺では黄檗希運からでなく、臨濟正宗として臨濟義玄より法系を数へ、隠元は臨濟正伝三十二世とする。ついで、二代住持(今で言へば管長)の木庵、準世代の即非、三代の慧林は隠元の跡を継ぐといふ自覚とともに三十三世を名乗った。次の「野」とは、在野、野人、野鄙の意で、ここは僧侶なので、野僧、野衲と自らを謙遜して表現した。落款は「性機之印」と「獨知」の印が二つ押されてゐる。慧林(獨知)がこの書を記したのは、佛日寺に入った寛文元年から、隠元が寂する同十三年の間と推定される(延宝六年(一六七八)に他の寺の開山、同八年に黄檗第三代を継いだ)。

慧林は高雄山に登り、その時の感慨の詩を残してゐる。「高雄山真言寺に遊ぶ」(五言律詩、『慧林禪師滄浪声』寛文六年)では弘法大師

の名残を求め、「中秋の日、重ねて高雄山に遊ぶ」(七言律詩、『慧林和尚耶山集』、延宝六年、耶山とは摩耶山のこと)では十年前を回顧して、自然の美しさを讃へる。ただ、ここでは隠元と同じく、和氣清麻呂の事蹟については何も触れてゐない。

注目すべきは『佛日慧林禪師語録』九に収録されてゐる「和氣真人小影 大医院」と題する七言律詩である。ここでは書き下し文と現代語訳を記す。

肘後単つに懸く不死の方

天朝寵秩して姓名香ばし

道明の賢聖、書、篋に盈ち

味辨の君臣、薬、囊に満つ

和氣伝家、風遠くに播かれ

清真行履、世、良と称ふ

伽陀聊説、遺範を旌し

普濟の陰功、代を蓋ひて彰かなり

和氣氏の医術は肘の後ろにただ一つお守り札を懸けてゐるやうに、その不老の処方ば並はぶれた力量を持ち、朝廷では特別に和氣氏を尊び、医家の官位を授け、その名は秀れて広く知られてゐる。道徳心が高く、人格、才能の優秀な人物は書が箱にたくさんあり、物事の趣をよく考へ、道理をわきまへてゐる君臣は、薬が袋にいっぱいある。和氣氏の医術の家伝は、その流儀が遠くにま

で影響を及ぼし、その清く正しい行ひは世に立派だと讃へられてゐる。仏を讃美する歌や少しの説法が、遺した手本となつて後に表れるやうに、和氣氏の普く人を救ふ隠れた功績は、世を覆ひて包むほど明らかに輝いてゐる。

ここで難解なのは第一句の「肘後単懸不死方」である。「肘後」は肘の後ろ、脇の下であり、ここは肘後符の意で、肘に懸けるお守り札のことである。「方」は処方、薬の調合を指す。「単懸」は『禪語辭典』⁽¹⁹⁾所収の用例（聯灯会要）を参考にして説明する。「肘後斜懸奪命符」は「肘後斜めに懸く奪命符」と訓み、「肘のうしろにはななめに命取りの札をつるしている。並はずれた力量の持ち主であることを示す」。また、前の『禪学大辞典』で、「肘後に符を懸く」とは「護身符を身につけることから、身の安全を図ること」である。以上の二点から類推して、右の第一句を前記の通り解釈した。なほ、『太平記』卷三十九に、「（光嚴院の）御供の僧は、仕へて懸けし肘後の府（符のこと）に替れる一鉢を脇にかけ」とあり、やはり護身用に使はれてゐたことが分る。

「和氣真人小影」とは主題の偈に描かれた肖像画のことであらう。隠元老師の偈を揮毫するだけでなく弟子として師にならつて作ったと思はれる。「大医院」（優れた名医）とあるやうに、和氣清麻呂の功績ではなく、医家としての和氣氏を詠んでゐる。と言つて、和氣真人が和氣清麻呂以外の者を指すのではない。前述の通り、隠元は明確に「和氣清麻呂真人」と記し、清麻呂でなければならぬ（後述）。ここ

では、慧林が師の偈を代りに揮毫しただけでなく、自らも和氣真人を景仰してゐたことが重要なことである。この真人は、その道の奥義に達した人といふ意味で、この詩では医道の極意を得て、医道を悟つた人、その神妙を究めた人といふ美称、尊称である。隠元の偈の「賢人」と共通した意味であり、その真人の源たる人物として清麻呂を讃へてゐる。なほ注意すべきは、清国から渡来した二人は日本語を十分に解し得なかつたこと、禅僧であり、細かく厳密に表現するのではなく、急所を押へての表現であるといふことである。

〈補説一〉半井瑞雪

前述の通り、和氣真人の詩偈は半井瑞雪が隠元に遠祖和氣清麻呂を推薦することを依頼して作られた。ここで、半井瑞雪の功績について述べる。室町時代、典薬頭の和氣明親（驢庵）は姓を半井に改めた（後述）。その孫の、清麻呂を始祖として二十四代目に当る成信（瑞桂）の子、宗閑（瑞雪）は医師の務めの傍ら、東福門院と京都所司代の板倉勝重の間を取り持つて、神護寺の復興に尽力した。本尊である薬師如来の周囲を護る十二神像の足の柄はた（突起）に、瑞雪の修理銘が記され、旧金堂（毘沙門堂）前と大師堂前とにある石燈籠にはそれぞれ「奉寄進薬師如来御前 和氣清麻呂末裔 半井瑞雪」、「奉寄進 弘法大師御前 和氣清麻呂末裔 半井瑞雪」の刻銘が残されてゐる。また、このほかに、「高雄神護寺書籍靈宝目録」⁽²⁰⁾によると、瑞雪は「牡丹唐草之詩絵」の「靈宝箱」二つ、瑞雪一門中として「弘法木像、并倚子、湯瓶、履」^{はきもの}を寄進してゐる。この目録は、明暦二年（一六五六）に

寺から奉行所宛に書き上げたものを、文化五年（一八〇八）に立原翠軒が手写したものである。この同じ明暦二年に、瑞雪が寄進した時成像に前南禅寺の僧が詩偈を作った（後述）。従って、同年の目録には間に合はなかつたのであらう。

このやうに、隠元が詩偈の題詞に和氣清麻呂を瑞雪の「遠祖」と表してゐることを併せて、瑞雪はその意識と自覚を十分に持つてゐた。瑞雪の兄である二十五代の利親（瑞玄）の孫、二十七代の成忠（瑞堅）も神護寺を「吾祖清麻呂卿草創之淨刹、而和氣之氏寺也」（高雄山神護寺縁起⁽²²⁾）と言つてゐることから、江戸時代初期においても清麻呂を始祖として景仰する念が強くあつた。

瑞雪は延宝四年（一六七六）に没し、大徳寺真珠庵の半井家墓地に葬られた。瑞雪は庶子であつたが、正嫡に準ずる扱ひを受けた。その理由は、大徳寺真珠庵蔵『和氣世々墓所図』に「月叔（瑞雪の居士名）、庶為りと雖も、補撰之功有る故」としてゐる。⁽²³⁾「補撰」とはたすけることを中心になつて執り行ふという意味で、神護寺の復興と和氣清麻呂の顕彰に努力したことを指すのであらう。なほ、先に亡くなつてゐた小堀遠州の三女である瑞雪の室もその横に墓がある。

隠元は瑞雪と交流があつたやうで、「半井瑞雪に示す」と題する五言律詩の偈を作つてゐる。⁽²⁴⁾書き下し文と現代語訳を次に記す。

普門、瑞雪に下るは

真個、古来稀なり

苟しくも能く落處を誦すれば

直下、自ら幾を知る

小さく出でて師友に逢ひ

高雄、是れ依る所なり

無言、無説に對へて

大地、光輝を尽す

仏の力が瑞雪に通じて、悟りを開かせたことはまことに古来、稀なことである。瑞雪は物事の落着くところを十分にわかまへては、あらかじめそのきざしをよく把んでゐる。思ひも寄らず師友に逢つて、高雄山は寄り付き、親しめるところである。言葉を交はさなくてもあらゆる言説を超越して、この大地は輝きに満ちてゐる。

この詩偈の第五句の「小出」について、『大燈録』下に、「小出大遇」といふ語があり、思ひも寄らない待遇を受けて、修行者が師家に対して感謝するといふ意味である。⁽²⁵⁾ここから類推すると、「小さく出でて大きく逢ふ」と訓み、思ひも寄らず高雄山神護寺で師友に逢へたことを喜び、感謝する表現であらう。

〈補説二〉和氣真人

和氣真人が誰であるかは以上に述べてきたことで十分に明らかにされたが、この根拠になつた文献に基づく論考は今までなかつた。そこで、従来の二つの説が誤りであることを論証し、続いて、別の資料か

らやはり清麻呂であることを述べていく。

先に述べた通り、和氣氏三幅対を世に広めたのは杉立義一氏の著書、論文からである。杉立氏は初め、偈の中に「七百年來法眼裡」とあることからそれが瑞雪の時代から溯って、和氣時雨の時期に当るので、和氣氏医系の祖として時雨と判断した。しかし、この句は「七百年來」の事実を言っているだけで、時雨個人を特定してゐるのではなく、和氣医学の流れを叙してゐる。もし時雨のことであれば、あとの二幅と同じやうに時雨の名を出すであらう。次に、所功氏はこの「七百年來」を根拠に、それより百年以上も前の清麻呂以來と取るのは難しいと言ふ²⁶⁾。しかし、真人を清麻呂でないと判定するのにこの句を根拠にすることはできない。これは七百年間、医道に尽してきた和氣氏の伝統を讀へて表現してゐるのであり、この詩偈では清麻呂個人の功績は一言もしてゐない。さうして、所氏は杉立氏の第二案、和氣氏中興の祖と称される定成説に従って、「和氣定成あたり」と結論づけた。この「あたり」がどういふ意味であるか不明であるが、右の時雨説を否定した論法で、定成個人を特定してゐないと言へる。中興の祖といふ立場よりもっと広い視点から考へると、神護寺の本尊の薬師如来は医薬の道を司るものであり、その創建者である清麻呂を医家の祖として仰いだのである。和氣氏の後裔が和氣医道の根源を溯るとき、中興ではなく、精神と思想の在り所として、薬師如来、和氣清麻呂に至ることはごく自然なことであつた。

ちなみに、高瀬重雄氏は和氣氏と薬師信仰に関して、次のやうに述べてゐる。「和氣一族の仏教信仰は、主として薬師如来の信仰から出

発し、平安奠都とともに、天台、真言両派の外護へ移つた。和氣氏の一族が医薬の家として末永く活躍するに至る原初が、弘仁時代の薬師如来の信仰に出発する²⁷⁾。さらに、「和氣清麻呂が建てた神願寺に、薬師如来とその脇士がまつられていたということは、清麻呂とその一族は、厄難消除と無病息災を誦誦し、かつ医薬を服することによって病気の平癒が可能であるとしていたにちがいない」と、「和氣氏の医療思想の淵源²⁸⁾」を明らかにした。このやうにして、和氣医学の系統における清麻呂の位置づけを判断すべきである。

では次に、今まで取り上げなかつた文献から、真人が清麻呂であることを考証しよう。

(1) 半井本家に伝はる文書に「瑞雪高雄山神護寺へ寄付 束帯肖像 参幅²⁹⁾」がある。明治三十年代に写されたとき、三幅の詩偈が書かれてゐるが、誤字が散見される。これに、明確に「清麻呂 肖像」と記す。半井家では清麻呂と伝承してゐることが分る。

(2) 神護寺に蔵されてゐる三幅対は、箱書には「和氣氏三幅対 寄進半井瑞雪」と書かれてゐるだけであるが、箱の中に附箋が入つてゐて、これに「清麻呂、時成、基成」と記されてゐる³⁰⁾。これに基づいて、神護寺で毎年五月上旬に開かれる「宝物虫執行事陳列」の目録に「和氣氏三幅対(清麻呂、時成、基成)」としてゐる。

(3) 「神護寺名宝展観目録 昭和十年 自五月十九日 至 五月三十一日」によれば、「中 和氣清麻呂、左 和氣時成、右 和氣基成 像、絹本着色 三幅」とある。和氣清麻呂の解説に「上述の本寺沿革中に記するが如く本寺と頗る関係が深い人である」と述べる。なほ、

清麻呂を真中に置き、左、右の順に配してあることに注意すべきである（後述）。

(4) 昭和十五年、東京の王仁神社（渋谷区青葉町）が紀元二千六百年記念に当社蔵の「和氣清麻呂公像」を、天覧を賜った後、複製して頒布した^②。詩は五言で四十行に達する古詩で、寛文十年（一六七〇）九月に、前南禅英中玄賢が作った。英中は南禅寺第二百八十世住持で、元禄八年（一六九五）に没してゐる。この詩の最初と最後の四行を取り上げる。

和氣清麻呂

系緒垂仁に出づ

断々他技を愧ぢ^は

世を挙げて真人と称ふ^た

和氣清麻呂は垂仁天皇の系譜から出てゐる。一つのことには精神を集めて、他のことにそれることを恥ぢ、世の中の誰もが真人として称へてゐる。以下、道鏡事件、宇佐八幡宮の神勅奏上、高雄山で「護国祚」の寺の開創を詠み、「大功一世を盡^{おほ}ひ」と、隠元偈の「大功」を使つてゐることが注目される。そして、

累世、天禄を享け

弘文、縉紳を成す

児孫、千載に栄え

和氣猶ほ春の如し

と結ぶ。和氣氏は代々、天の恵みを受け、学問を弘め、身分の高い医官となった。その子孫は永久に栄え、和氣氏の誉れは春のやうに生氣

が漲つてゐる。医学の面は直接に触れてゐないが、隠元の用語を遣つて源流に溯つて、清麻呂の功績を讀へてゐる。

先に慧林（獨知）の書を寛文元年から同十三年の間と推定したが、これは同十年である。ほぼ同じころに、清麻呂を「真人」と評価する共通の認識があつたことは確かである。この後書に「遠孫 和氣惟眞 信士請ふ」とあるが、惟貞がどのやうな人物か、系図には見られない。また、肖像は右向きであるが、真人像と同じく衣冠束帯で、「狩野成信画」と、王仁神社の説明書に記す。

(5) 本島知辰の『月堂見聞集』^③は、京都に住んでゐた著者が見聞した筆録で、この卷二十八に享保十九年（一七三四）三月二十六日より、「高雄山神護寺開帳靈宝」として、薬師如来、弘法大師御作組を挙げる。これに続いて、「清麻呂、時成、基成画像、但土佐光信」、「清麻呂伝記」と記す。なほ、土佐光信は室町後期の画家で時代が合はない。大徳寺真珠庵の襖絵を描いた土佐光起の誤りであらうか。私見を交へず、客観的に記録してゐることが重要である。また、有職故実家の松岡行義が著した随筆『後松日記』卷八に「在京日記」がある^④。天保四年（一八三三）四月十七日に神護寺で見た宝物の中に「和氣氏三代像」と書き留めてゐる。これは三幅対のことであらうが、「三代像」とはどういふつもりなのか。字義通り、三代と言へば、定成、時成、基成となるが、その真意は分らない。三幅の三肖像を三代と判断しただけのことであらう。その二十年後、嘉永七年（一八五四）、峨山青護が『高雄榎尾榎尾巡参案内記』を刊行した^⑤。高雄山神護寺の説明に続いて、「当寺靈宝」として、「和氣清麻呂、時成、基成尊像 土佐光

信筆」と記し、次に「和氣清麻呂社」を述べる。江戸時代を通じて、和氣真人は清麻呂と認識されてゐたのである。

(6) 江戸時代後期の儒学者、書画家の貫名海屋は「真人、真に抗直し、自ら其れ忠誠生る、…死を誓ひて天祚を護り、功績誰か争ふ有らんや」と、清麻呂を「真人」と讃へる。また、漢詩人の村田智哲は「和氣真人」と題して、「一言、命に反す紫宸の下、声、九重を震はし肝膽寒し」と、清麻呂の宇佐神託の奏上を七言絶句で詠んでゐる。江戸初期に始り後期に至るまで、真人として評価されてゐたのである。

(7) 幕末から明治にかけての国学者、矢野玄道は、『護王神御伝記』に次の通り記してゐる。「神護寺の秘庫に伝りし明神（護王大明神で清麻呂のこと）の真筆など云物（伝真筆と言はれる「我獨慙天地」のこと）の世に聞ゆれど、総て信に取らざること、月堂見聞集ナル享保十九年全寺開帳目録に清麻呂伝記また土佐光信筆清麻呂時成基成図絵とあるのみにて、他物あること無にて知るべし」。この文章の主旨は伝真筆の否定にあるが、先の『月堂見聞集』を引用しながら、三幅対の存在を認識してゐる。以上によって、真人が清麻呂であることが確実に became 。

三、和氣時成像



前南禅 昕叔老衲頭倅書

明曆第二歳舍丙申三月吉辰

未不得黙止綴一偈塞其責矣

後昆半井瑞雪介于人請記其顛

正四位上典葉頭和氣時成肖像

起死回生地下僊

胸蟠萬卷名鳴世

亘今亘古俊才全

入五雲深開講筵

〈訓読〉

前南禅、昕叔老衲頭倅書す

明曆第二、歳、丙申に舍る、三月吉辰

未だ黙止し得ず、一偈を綴り、其の責を塞ぐ

後昆半井瑞雪、人を介して其の顛を記さんことを請ふ

正四位上、典葉頭、和氣時成の肖像

起死回生せん地下の僊

胸、萬巻を蟠らせ、名、世に鳴る

今に亘り古へに亘り、俊才全し

五雲の深きに入りて講筵を開く

〈現代語訳〉

前南禅寺の老僧、昕叔頭僊が書く。

明暦二年、歳星(木星)が丙申に舍る(干支は丙申)、三月吉日。

黙ってそのままにしておくことができず、詩偈一首を作って、その責任を果す。

後の子孫である半井瑞雪が人をなかだちにして、先祖の根本のいきさつを記してほしいと依頼した。

正四位上、典葉頭の和氣時成の肖像。

和氣氏の医術の力によって、生き返らせることができよう、死にかかってゐる人だけでなく、あの世の人までも。その脳の中には多くの書物が蓄へられ、和氣氏の医道の評判は世に響いてゐる。昔から今に至るまで、その秀れた才能は欠けたところがなく完全であり、五色の雲のかかる奥深い宮中に入って、治療を施すほどである。

〈語釈〉

○前南禅昕叔老衲頭僊―昕叔頭僊は『南禅寺史』⁽⁸⁸⁾によれば、寛永十七年(一六四〇)に入寺し、万治元年(一六五八)に没してゐる。南禅寺の準世代(住持)で、夢窓疎石派に属してゐた。明暦二年(一六五六)にこの書を記してゐるので、このころは隠居してゐたのであらう。落款は「禅」の漢字の扁と旁の間に「南」の漢字を配した印と、昕叔の印の二つを押ししてゐる。「老衲」の衲は僧侶の自称で、老僧を謙遜して言った。

○歳舎―歳星が舎(宿)ること、歳次と同じである。歳星(木星)は十二年で天を一周し、その一年に一次を行く。「歳次辛亥」(萬葉集二二八)は「歳、辛亥に次る」と訓む。一般にいふ干支のことである。

○後昆―昆はあと、世継のことで、後昆は子孫、後裔、末裔の意である。

○典葉頭―宮内省に属する官司で、宮中の医療、薬園、官人の医療、医師の養成などを司どる典葉寮の長官。

○地下僊―地下はあの世、冥土、僊は仙人、やまびとのことであるが、このままでは意味が取りにくいので、文脈を考へて前記の通りに解した。

○胸蟠萬巻―「蟠」の上の漢字がはつきりせず、旁の勺の中の文字は「御」の真中の文字に見えるが、大漢和辞典にない。そこで、これとよく似た漢字の「胸」を誤つたと解する。この字義は脳と同じで、「蟠」はわだかまる、龍や蛇などがとくろを巻いて伏してゐる、また、つもる、あつまることである。即ち、ここの意味は、その脳の中には数多

くの書物が集り積って秘められてゐる、といふことであらう。

○「亘今亘古」「句双紙」「禪林句集」には語順を逆にし「亘古亘今」とあり、「いにしへにわたり、今にわたる」と訓む。

○入五雲深―五雲は仙人、仙女の遊ぶところであるが、比喩的に捉へてもこのままでは分りにくい。隠元は渡来僧であったが、昕叔は日本人であり、ここは国語の用法として、五雲が宮中を指すと考へる。和氣定成は侍医であり、典葉頭であった。『大日本人名辞書』⁽⁹⁾によれば、定成は後鳥羽上皇、高倉天皇、皇太后の病気を治した。また、その息で本詩偈の時成は、父と同じ役職に就き、後鳥羽上皇、中宮に施術して治癒した。このやうに宮中の信任が厚く、侍医として評価を得たことをこのやうに文学的に表現したのであらう。次の「開講筵」は医学の講義をしたといふのではなく、病状の説明や処方の方を説いて上奏したことを言つてゐるのであらう。

〈成立〉

この書の成立の事情は題詞に詳しく記されてゐる通りである。話は前後するが、時成の父、定成は保元の宇佐使を務め、典葉頭、織部正、侍医として名声を博した。今まで丹波氏に押されてゐた医学を盛り返して、和氣氏中興の祖とされる。文治四年(一一八八)、六十六歳で没した。時成は定成の三男で、典葉頭、侍医、織部正として、和氣医学を継承した。承久元年(一二二九)、六十一歳で没した。典葉頭は正五位下が普通だが、時成は定成と同じく正四位下に昇進した。⁽¹⁰⁾

この三幅対の中心人物の真人が清麻呂であることは先の考証の通り

であるが、これを定成として仮定して、時成、基成に続く三代とする
と自然な流れとなる。あるいは、清麻呂、定成、時成であるならば、
これも単純に首肯できる。問題はなぜ定成を選ばず、時成から始め、
基成につないだかといふことである。これは難しい問題であつて、次
節で考察することにする。

四、和氣基成像



芝朮孔子	蔘甘温公	結雒陽社	追魯國風
德行惟肖	東土日東	頤神妙術	允執其中
常諳脉訣	春弦夏洪	忍我三折	具仙五通
靈丹一粒	却老還童	久典藥局	施太醫功
和氣花竹	入内家叢	孫枝子葉	鬱々葱々

右 正四位上和氣基成公之遺像也
其後裔半井瑞雪醫翁就山塾

見需賛詞不獲峻拒賦四言于韵以

應厥命云

前南禅九巖野釋中達贅焉

〔訓読〕

芝朮の孔子 參甘の温公 雒陽に社を結び 魯國の風を追ふ
 德行惟れ肖る 東土の日東 神を願ふ妙術 允に其の中を執る
 常に脉訣を諳じ 春に弦、夏に洪 我を忍び三折 仙五通を具ふ
 靈丹の一粒 老いを却け童に還る 久しく典藥局にあり 太だ醫
 功を施す

和氣花竹 内家の叢に入り 孫枝子葉 鬱々葱々たり

右、正四位上、和氣基成公の遺像なり

其の後裔、半井瑞雪醫翁、山笠に就き、

賛詞を需めらる、峻拒するを獲ず、四言を韵に賦し、以て

厥の命に應ず、と云ふ

前南禅、九巖野釋中達、焉に贅す

〔現代語訳〕

芝朮の葉草のやうにその説く教へがじっくりと効果を表す孔子、人
 参や甘草のやうにその語る言葉がゆつくりと真価を表す温公、その温
 公は洛陽に隠栖し、孔子を慕ひ、礼を尊び、魯國の国風を求めた。道
 徳にかなった立派な行ひといふものは似るもので、それは東方の日本
 に見られる。精神を養った秀れた技術は誠実にその中庸の道を執り守

る。

和氣基成はいつも脈を測る書物を暗記し、春には脈搏が押へるやう
 に高く、夏には浮くやうに強く打つ状態になるまで精勵した。自分自
 身、耐へ忍んで地道な修行を積んで良医になり、五つの超自然的な神
 通力を持つ仙人に至った。たった一粒の靈藥で、老いを遠ざけ、童子
 のやうに若返るほどのききめがあった。基成は長らく典藥寮で長官と
 して勤め、医療で非常に高い功績を挙げた。

和氣氏は宮中において侍医としても励み、その誉れは子々孫々に至
 るまで、樹木が青々と繁り伸びるやうに豊かに盛えてゐる。

右は正四位上の和氣基成公の遺像である。

その後裔の半井瑞雪老医師が奥深い寺に来て、野僧の私は基成公
 を讀へる詩偈を作るやうに求められた。強く断ることができず、四
 言詩を作つて、その依頼に應へるものである。

前南禅寺の野衲である九巖中達がここに贅言する。

〔語釈〕

○芝朮孔子―「芝朮」は紫朮とも書き、菊科の多年草。乾燥させた地
 下茎を健胃、整腸の薬として用ゐる。朮は長生きし、神仙になるとい
 ふ伝説がある。ここの文言は、南宋の朱子の『四書或問』卷三十九に
 ある「孔子之道、則広大而中正、渾然而無跡。：其万一參苓芝朮之為
 薬」に基づいてゐる。孔子の道は広大で中正であり、渾然一体として
 ゐて、具体的な痕跡や事例があるわけではない。それは葉の參苓や
 芝朮のやうなものである。つまり、孔子の説く道は即効薬ではなく、

じつくりと効いて、人を教へ導くといふことを表してゐる。

○蓼昔温公―「蓼」は人參、朝鮮人參、「昔」は甘草で、どちらも漢方薬として用ゐられる。温公は北宋の政治家で、司馬光を指す。政界を退いた後は、洛陽に閑居し、歴史書『資治通鑑』の撰述に力を注いだ。この文言は北宋の学者である程顥、程頤の兄弟の『二程遺書』卷十にある「君実之語自謂如人蓼昔草。病未甚時、可用也。則非所能及」に基づいてゐる。「君実」は司馬光の字で、司馬光の語る言葉は人參や昔草のやうである。病氣がそれほど甚しくない時に用ゐられる。つまり、その説くところはすぐに効果が表れるものではなく、ゆっくりと真価が出てくるといふことを表してゐる。

○結維陽社 追魯國風―その司馬光が洛陽で開いた庭を獨樂園といひ、独立独歩、自由自尊の境地で、自適の生活を楽しんだ。この様子は、「獨樂園記」に詳しい。ここで、「志倦み、体疲るれば、葉を采り」とあり、「獨樂園七題」のうちの「采葉園」では、第一句で「韓伯林を愛す」と詠む。韓伯林（韓康）は、長年、葉を長安の市で掛値なしで売つたとされる。このやうに司馬光と葉草の関わりが見られる。「社を結び」は、結社のことで、蘇軾（東坡）は「司馬君実獨樂園」で「先生、臥して出でず、冠蓋、洛社に傾むく」と詠んでゐる。「先生がそこへ引つこもられて、高貴の人たちも社のなかまへ引きよせられ」といふことである。司馬光は伝統的な儒教理念を重んじ、礼の実践を説いた。このことを「魯國の風を追ふ」と言つたのであらう。なほ、相国寺の僧侶の景徐周麟（永正十五年（一五一八）没）は「翰林葫蘆集」で、「温公獨樂園」と題する七言絶句を作つてゐる。臨濟禅では親しみのある

話であつたのであらう。

○東土日東―「東土」は東方の国、東方の地、「日東」は日本の別名。ここから、日本の話になる。

○頤神妙術―「頤」は俗字で、本字は頤、「頤神」は精神を養ふことで、そのやうに妙なる技術は、と次に続く。

○允執其中―「允執」は誠実に執り守る、必ず守ること、「中」はほどよさの意で、中庸、中正のことである。この文言は『尚書』（書経）大禹謨にある「人心惟危ふく、道心惟微かなり、惟れ精惟一、允に厥の中を執れ」に基づく。人の欲情から発する心は危ふく、正しい道徳心は物欲のために明かにし難い。ただ心を精一、專一にして、誠意をもつて中庸、中正の道を守るといふことを表してゐる。この句は『論語』堯曰第二十にも政治の道の心構へとして使はれてゐる。

○脉訣―医者が脈を見る方法を述べた書。ここから和氣基成の話になる。

○春に弦、夏に洪―「弦」は弦脈で、血管が張つて脈搏が急なこと、「洪」は脈搏が浮いて強く打つことで、ともに基成の身体の状態をいふ。

○三折―三度、肘を折るほど経験を積んで、良医となること。この肘は自分、または他人の肘の両説がある。地道な修行を積むことをいふ。

○仙五通―「五通」は五神通ともいひ、前の『広説佛教語大辞典』によれば、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通（如意通）をいふ。「特別な修行者のもちうる五種の超自然的な能力のこと、五つの超人

的な力」の意である。五通仙はこの五神通を得た仙人のことで、これを原文では押韻の関係で「仙五通」と文字の順序を変へたのであらう。○靈丹一粒―「丹」とはよく練った薬、仙丹で、効験の高い靈薬のこと。

○和氣花竹、の四句―全体として和氣氏の医家としての繁栄を花や竹に喩へ、その縁語で詩的に表現してゐる。「内家」は官人の意なので、ここは宮中で侍医として勤めたことをいふ。「孫枝子葉」は、「孫子枝葉」と語順を変へても同じ意味で、子孫が枝や葉が新たに生じ、伸びていくやうに、後まで増え、栄えていくことである。「鬱」と「葱」はともに樹木がこんもりと青々と繁るさまをいふ。

○山埜―山野で、田舎、あるいは、僧侶が謙遜して用ゐる自称の意もある。田舎は自分の住む寺で、やはり謙辞である。現代語訳では両方生かすやうにした。

○賦四言于韵―「四言」は一句が四言、「韵」は韻と同じで、全体として四言詩の韻文を作ることである。本詩偈は四行が一節で、五節で二十行と、長大である。

○九巖中達―『南禅寺史』^④を中心に述べると、九巖は建仁寺の第三代住持であつたが、「前南禅」と、前の所属の寺院を名乗つた理由と詩偈を作つた時期については次項で述べる。「野釋」の「野」は真人像にもあり、「釋」は仏門、仏弟子の意である。野柄、野僧にもあり、「野釋」は野の釋と解するのがよい。

○贅焉―「贅」は言はなくてもよいことを言ふ、余分な言葉をつけ加へることで、贅言、贅辞、贅すと云ふ語がある。もちろん、これは謙

遜して言つてゐる。「焉」はいろいろな用法があるが、ここでは、ここ(に)といふ意味である。

〈成立〉

半井瑞雪が「贅詞」を頼んだことは分るが、その時期がいつかについて考証しよう。九巖中達は「準世代」として南禅寺住持に準ずる扱ひを受けてゐたが、これは転任してからか、死去してからの称号である。万治元年(一六五八)に相国寺子院の鹿苑院ろくゑんいんに住持し、禅宗寺院を取締り、僧侶を管理する僧録司に任じられた。その三年後の、同四年に没してゐることから、南禅寺の住職が最初であらう。ついで建仁寺住持に赴任し、その後、相国寺に移つたのであらう。「前南禅」は前の所叔、英中に揃へて、自称したと思はれる。黄檗宗は臨濟禅であり、瑞雪が大徳寺を通して臨濟宗の寺院に関はつたのであらう。以上のことから、この詩偈を作つたのは万治元年以前、明暦、承応に溯る六年間ほどの期間と推定できる。

五、三幅対の意義

以上、和氣氏三幅対の詩偈の内容の解釈と作者を中心に述べてきた。ここで、三幅対を総合的に分析し、その意義を考察しよう。

まづ、もう一度、成立の時期について触れる。清麻呂像は詩偈が万治二、三年(一六五九、六〇)、揮毫が寛文年間(一六六一―一六七三)、時成像が明暦二年(一六五六)、基成像が明暦三年以前、参考に

英中玄賢作が寛文十年（一六七〇）で、それより前に清麻呂像が出来上ってゐて、奉納した半井瑞雪が延宝四年（一六七六）没であった。結局、明暦二、三年に時成像、基成像がほぼ同時に、その五、六年後、寛文元、二年ごろに清麻呂像が出来て、前後、五、六年間のことと推定できる。

次に三つの像の服装について考察する。清麻呂像は正式の衣冠束帯姿で黒色、笏を持ち、太刀を帯び、これのみ上畳に坐る。時成像は冬の直衣姿で、笏を持たずに檜扇の前に置く。基成像は夏の直衣姿で檜扇を開いて持つ。このことから、清麻呂は最高の敬意でもって中心的な位置を占め格調高く描かれ、時成、基成と区別し、時成が次に続くことが分る。

三幅対を並べて掛ける時は、最上位の者を真中に置き、次が向って右側、ついで向って左側となる。清麻呂は左向きであるが、中心の者が正面を向くとは限らない。次の時成は左向きに對して、基成像が肖像画では珍しい右向きであるのは、もともと三幅で一對にする意図からであらう。

肖像画については不案内なので、より深く理解するため、井筒風俗博物館事務局長の春田純一氏より得た教示を次に要約して記す^④。肖像画だけで判断すると鎌倉時代の人物である。折目の立った強装束^{こわ}で、直線的な描き方をしてゐるのは平安後期からである。また、冠の纓^{えい}の形から鎌倉時代である。ただし、装束だけで描かれた人物の時代を判定することはできない。江戸時代前期の絵師が鎌倉時代の装束として意識して描いたかどうかである。神護寺藏の平重盛像や源頼朝像を参

考にしたことは十分に考へられる。真人像を清麻呂に擬したといふ判断は可能である。黒色の装束や刀は三位以上であるが、医者が笏や刀を持つことは儀式の正式の衣服として有り得る。最上位の人は実際の位より高い位として描くことが多い。三つの像は同じ絵師によるとは思へない。先に出来上ったものを手本にして、次のものを描いたのであらう。三幅の場合、変化をつけて描くものである。以上の教示は拙稿の内容をより深くする上にも適切なものであった。

次に三幅対そのものを考へると、これは三幅で一對となる掛物で、もと仏画で、中央に本尊、左右に脇侍（夾侍）の菩薩を掛けたのに基づいてゐる。釈迦如来に對して文殊、普賢菩薩、阿弥陀尊に對して觀音、勢至菩薩、薬師如来に對して日光、月光菩薩が知られてゐる。黄檗宗では隠元に對して、木庵、即非となる。このやうに見てくると、真人像は本尊に相当する崇高な聖者としての位置づけであり、前述の通り、これは清麻呂しかあり得ず、いくら中興の祖といつても定成では力不足であらう。

なほ、付け加へれば、『神護寺』^⑤によれば、『神護寺略記』に神護寺仙洞院に後白河法皇の画像を中心に、平重盛、源頼朝、藤原光能、藤原業房の画像があると書かれてゐる。現在は重盛、頼朝、光能の像しか残つてゐないが、これから判断して、「法皇を中心に、重盛と光能がその向かつて右側、頼朝と業房が左側に並べられ、いずれも法皇の方に向くように描いたと思われる」。このことから考へると後白河法皇が本尊の位置づけであり、近臣が脇侍として向き合つてゐる事情がよく分る。これは和氣氏三幅対と同じ構図であり、本尊を真人として

清麻呂を崇敬したことが自然なこととして理解されるのである。

残る問題は上来、少しづつ触れてきた、半井瑞雪が清麻呂を中心にして時成と基成をなぜ選んだかといふことである。系図をよく見ると時成の子は三男の親成が本家を継ぎ、この系統が瑞雪に至ってゐる。長男の基成は後に五代で絶えてしまった。つまり、瑞雪の血筋は時成からといふより、その次の代の、基成、親成が分岐点をなしてゐる。瑞雪は後継者もなく、庶子であり、本流にはなれない運命にあった。その自分の立場を十分に認識し、神護寺の復興と清麻呂の顕彰に尽力しつつ、自らを基成に擬して、自分の立場を自覚したのではないだろうか。和氣氏中興の祖とされる定成は、当然、時成、基成に受け継がれてゐる。しかし、本流になれなかつた基成の家系は既に断絶した。それはまた自身の姿でもあった。少し穿ち過ぎた見方ではあるが、一つの考へ方を提示しておく。

もう一つ考へられるのは、桂仙堂文庫（杉立義一氏）蔵の和氣長成像と和氣親成像である。以下、杉立氏⁽⁴⁵⁾によると、長成は時成の兄の定長の子で、典薬頭、権侍医であつた。親成は前述の通り、時成の子、基成の弟で、典薬頭、織部正となつた。この二像は「和氣氏某家系に伝来した」もので、「画風等より江戸時代中期に原画を写したものである。そこで、以上の四像をまとめると、像主は時成とその子二人と時成の甥である。長成と親成の肖像画の存在を知つた瑞雪が、中心の時成とその子基成が欠けてゐるので、それを補ふ意図もはたらいたのではないだろうか。

神護寺を開創した和氣清麻呂は当寺に葬られ、今も墳墓がある。中

世からは護法（ゴホウからゴオウ）善神^{ぜんじん}として祀られ神護寺の仏法の守護神となつた。嘉永四年（一八五二）に孝明天皇はこの護法善神社（護法神社、和氣清麻呂社）に正一位護王大明神の神階と神号を追贈し、護法を発音通り、護王と文字を改め、護王神社と改称された。当社は明治十九年に明治天皇の思召しにより御所西の現在地に遷座された。神護寺境内の跡地は和氣公靈廟として今も崇敬されてゐる。このやうに和氣清麻呂と由緒の深い高雄山神護寺に和氣氏三幅対が今なほ寺宝として蔵せられてゐることに深い意義が存するのである。

〔注〕

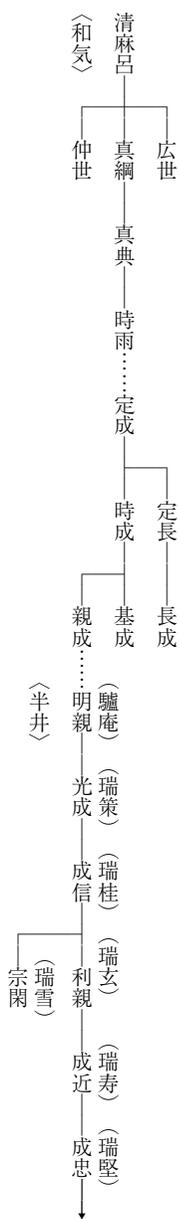
- (1) 京都府医師会編、思文閣出版、昭和五十五年。
- (2) 『京の医史跡探訪』初版、同、増補版、思文閣出版、昭和五十九年、平成三年。「和氣・半井家（本流分流関連）略系図」『啓迪』八、京都医学史研究会、平成二年四月。「和氣（半井）氏の肖像」『北陸医史』十五ノ一、北陸医学史同好会、平成六年。
- (3) 『国訳禅宗叢書』十一、大正十年。『国訳禅学大成』十八、昭和五年。なほ「太和集」の「太和」は黄檗山萬福寺の地名から取られた。以下、太和集と略す。
- (4) (3) に同じ。
- (5) 『普照国師語録』（『国訳一切経』六六）。
- (6) 「恩賜百屯の綿兼ねて七言の詩を奉謝する詩」。渡辺照宏、宮坂有勝校注『三教指帰 性靈集』（日本古典文学大系）、岩波書店、昭和四十三年。
- (7) 『古学先生文集』五（日本思想大系）伊藤仁齋 伊藤東涯。清水茂校

- 注、岩波書店、昭和四十六年。
- (8) 『普照国師語録』(『新修大正大藏經』八十二)。
 (9) 『隠元画像』隠元題(『黄檗美術』、萬福寺、昭和五十七年)。
 (10) 小学館、平成十三年。
 (11) (6)に同じ。
 (12) 『故贈正勤操作大徳の影の讚』。
 (13) 人物叢書、吉川弘文館、昭和三十七年。
 (14) 駒澤大学禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』。大修館書店、昭和五十三年。
 (15) 中村元、福永光司他編、岩波書店、平成十四年。
 (16) 『臨濟録』、入矢義高訳注、岩波書店、平成元年。
 (17) 中村元著『広説佛教語大辞典』、東京書籍、平成十三年。
 (18) 『普照国師語録』(『国訳一切経』諸宗部二十三)。
 (19) 古賀英彦著、思文閣出版、平成三年。
 (20) 林屋辰三郎「高雄の史的回想」(『古寺巡礼京部五 神護寺』、淡交社、昭和五十一年)。
 (21) 奈良県吉野町の阪本竜門文庫蔵(黒川真頼旧蔵)。なほ、この目録に石燈籠は「式基」と記されてゐる。従来、一基とされてゐたのは誤りである。二基の刻銘の文字は摩滅して読みづらく、神護寺住職の谷内弘照氏の教示を得た(平成二十四年八月二十六日付書簡)。
 (22) 承応二年(一六五三) 伏原賢忠著。『大日本佛教全書』寺誌三、『國文東方佛教叢書』志部。
 (23) 宗田一「大徳寺・真珠庵蔵の半井家画像の補訂」『啓迪』一、京都医学研究会、昭和五十八年五月。杉立義一「京の医史跡探訪」前掲(2)。
 (24) 『隠元和尚雲滄二集』二(『隠元全集』六、平久保章編、開明書院、昭和五十四年)。
 (25) (14)(17)に同じ。また、中川洪庵著『禅語字彙』、柏林社書店、平成二年、八版。
 (26) 『和気清麻呂公の絵像集成』、護王神社、平成五年。
 (27) 『平安初期の山岳仏教と和気氏』『富山史壇』八八、越中史壇会、昭和六十一年七月。
- (28) 『平安時代の医家和気氏について』『北陸医史』七ノ一、北陸医史学会、昭和六十一年三月。
 (29) 杉立義一氏よりこの複写を頂戴した。
 (30) 神護寺前任職、谷内乾岳氏より筆者宛の書簡、平成三年三月二十一日付。
 (31) 恩賜京都博物館、昭和十年。
 (32) 当社は現在、存在しない。この肖像と書は掛軸にして配布されたやうで、護王神社に蔵せられてゐる。なほ、『英中和尚語録』(駒澤大学図書館蔵)にこの詩は含まれてゐない。
 (33) 『近世風俗見聞集』一・二(国書刊行会)、『続日本随筆大成』別巻二一四。ただし、ともに抄出本。
 (34) 『日本随筆大成』三期七卷。
 (35) 愛知県西尾市立図書館、岩瀬文庫蔵。
 (36) 『平安人物志』嘉永五年版に載る。この書は護王神社に表装されてゐないが、所蔵されてゐる。
 (37) 愛媛県大洲市立図書館、矢野玄道文庫蔵。
 (38) 桜井景雄著、法蔵館、昭和五十二年。
 (39) 講談社学術文庫版、昭和五十五年。
 (40) (39)に同じ。
 (41) この出典と解釈については、次の「蓼甘温公」とともに、京都産業大学教授の小林武氏の教示を得た。
 (42) 小川環樹校注『蘇軾』上(『中国詩人撰集二集』五、岩波書店、昭和三十七年)。
 (43) 星川清孝校注『古文真室(後集)』(『新釈漢文大系』十六、明治書院、昭和三十八年)。
 (44) 『五山文学全集』四、思文閣出版、昭和四十八年復刻。
 (45) (38)に同じ。
 (46) 平成三年十月三十一日、当館で直話。
 (47) (20)の中野玄三「図版解説 寺宝」。
 (48) (2)の「和気(半井)氏の肖像」。

〔補記〕

「和氣氏三幅対」の写真は『京都の医学史』(注1)の巻頭カラー口絵を使用した。
この転載について、神護寺、京都府医師会、思文閣出版の許可済みである。

〔付図〕
和氣・半井氏略系図



Formation and Annotation of the Triad of the Wake Clan in the Collection of Jingoji Temple

Isao WAKAI

Abstract

1. Jingoji Temple and the triad of the Wake clan
2. Wake-no-Kiyomaro's portrait
3. Wake Tokisige's portrait
4. Wake Motosige's portrait
5. The significance of the triad

Keywords: the triad of the Wake clan in the collection of Jingoji Temple, Wake-no-Kiyomaro, Wake Tokisige, Wake Motosige, Nakarai Zuisetsu